

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：32608

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：16K16806

研究課題名(和文)南スラヴの口承文芸と現代文学の連関に関する研究 イヴォ・アンドリッチを中心として

研究課題名(英文)Study on the Linkage between South Slavic Oral Literature and Contemporary Literature

研究代表者

奥 彩子 (OKU, Ayako)

共立女子大学・文芸学部・教授

研究者番号：90513169

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果としては、ユーゴスラヴィアを代表する映画監督エミール・クストゥリツァにおけるアンドリッチの意義について論じた論文、アンドリッチのボスニア・ムスリムによるイヴォ・アンドリッチ批評に関する学術論文、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの中等教育における「文学史」に関する発表などがある。アンドリッチ自身がどのように自らをユーゴスラヴィアに位置づけ、また他者からどのように位置づけられているかを具体的に明らかにした。また同じくユーゴスラヴィアを志向する作家ドゥブラヴカ・ウグレシッチがどのように古典作品を現代文学へと連関させているかなどの研究を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多民族社会を背景とするアンドリッチの文学は、ユーゴスラヴィア連邦解体後の各地で「国民文学」が再構築される過程で、毀誉褒貶にさらされてきた。本研究ではそうした政治的拘束にとらわれた読解を再考し、アンドリッチがむしろ口承伝承の豊かさを背景として、共存と摩擦の両義性を描こうとしたこと、そうしたアンドリッチの姿勢が現代文化にも影響を与えていることを明らかにした。ボスニア・ヘルツェゴヴィナが、ヨーロッパとイスラームという二つの文化圏の対立を越えた、新しいヨーロッパ文学像を生起する場となっていくとき、アンドリッチの受容をめぐる議論は今後も重要な鍵となるであろう。

研究成果の概要(英文)：Ivo Andric, Nobel laureate writer, has been subjected to criticism in the process of reconstructing national literature in Bosnia and Hercegovina after the dissolution of Yugoslavia.

This project reconsiders such politically constrained readings and reveals that Andric rather tried to depict the ambivalence of coexistence.

研究分野：ユーゴスラヴィア文学

キーワード：ユーゴスラヴィア バルカン 東欧 世界文学 アダプテーション

1. 研究開始当初の背景

- (1) 東欧の文学は、その豊穡さにもかかわらず多言語性のゆえに日本では研究が少なく、未踏の沃野とも言われてきた。
- (2) 旧ユーゴ唯一のノーベル賞受賞作家イヴォ・アンドリッチ(1892-1975)は、ユーゴスラヴィア連邦解体後の各地で「国民文学」が再構築される過程で、毀誉褒貶にさらされてきた。アンドリッチの出身地であるボスニアには、カトリック・正教・イスラームという異なる三つの宗教・コミュニティを土台とした文化が共存してきたが、それらは伝統的に、近隣のクロアチア、セルビア、トルコの文化にそれぞれ包摂しうると考えられてきた。文学史においても、トルコ語・アラビア語といった東洋語による中世文学は外国文学として排除され、ボスニア・ムスリムによる文学はもっぱらセルビア・クロアチア語による現代文学に限定されて、「ユーゴスラヴィア文学」の枠組みに回収されていた。
- (3) しかしボスニアが95年に独立国家となると、新たに「ボスニア・ヘルツェゴヴィナ文学」を構想する試みが活発化する。高校ではトルコ語・アラビア語も含む多言語の文学史が教えられるようになった。
- (4) 一方で、アンドリッチは、「セルビアに寝返った」裏切者として、低い位置づけを受けることになった。旧ユーゴの他国ではどうかと言うと、セルビアではアンドリッチは偉大な「セルビアの」作家とみなされ、クロアチアでは若年期のクロアチア語作品のみを積極的に紹介している。このように評価が変転するなかで、近年では、同じくボスニア出身でセルビアに暮らす映画監督エミール・クストリツァがアンドリッチの名を冠した記念施設を建設し、論争を巻き起こした。
- (5) このように、イヴォ・アンドリッチの作品をどのように理解するのかということは、旧ユーゴスラヴィア諸国に生きる人々のアイデンティティの葛藤と深くかかわっている。

2. 研究の目的

- (1) 旧ユーゴスラヴィア唯一のノーベル賞作家アンドリッチの作品と、その背景にある南スラヴ口承文芸との連関を考察し、現代文化への影響を考える。
- (2) また、この研究を通じて、ヨーロッパとイスラームの境域ともいえるボスニア・ヘルツェゴヴィナの地域性に根ざした文学に、発祥地を越えて流通する世界文学としての可能性を見出すことをめざす。

3. 研究の方法

- (1) アンドリッチをとりまく当時の文化状況と、作家の個人的経験、創作のプロセスを複眼的に検討し、口承文芸から記述文学への移行についての事例を南スラヴの文脈から検討する。
- (2) ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおいては、セルビア・クロアチア語だけでなくトルコ語、アラビア語を含む多言語の文学史として国民文学が構想され、言語的な多様さをつうじて国民としての統合を強化するという個性的な試みが進んでいる。そのアクチュアリティをふまえて、国民文学への収斂から世界文学が生み出される可能性を探る。

4. 研究成果

- (1) 初年度には、ユーゴスラヴィアを代表する映画監督エミール・クストリツァにおけるアンドリッチの意義を論じた論文を発表した(奥彩子「ボスニアの奇想 クストリツァによるアンドリッチの翻案」小川公代、村田真一、吉村和明編『文学とアダプテーション』春風社、2017、pp.315-339)。この論文では、クストリツァがアンドリッチを自身にとってもっとも重要な作家とみなし、映像作家としてのキャリアの初期にアンドリッチの短編「ピフェ・タイタニック」を映像化していたこと、その一方で、世界的な成功をおさめたのち、アンドリッチの代表作『ドリーナの橋』の映画化を構想しながらも、現時点ではそれに成功していないこと、その意味について論じた。
- (2) 2年目にあたる2018年度は、ボスニアにおけるアンドリッチ研究の流れを追った。現在、アンドリッチはボスニア文学史において注記が必要な作家として扱われているが、それがどのような意味を持つのかを60年代の移民雑誌に遡って検証し、90年代、そして21世紀にどのような問題を投げかけているかを検討した。(奥彩子「アイデンティティの相克 ボスニア・ムスリムによるアンドリッチ批判の系譜」『スラヴ学論集』22号、日本スラヴ学研究会、2019、pp.171-196。)
- (3) 2019年度は、アンドリッチを含めた「ボスニア文学」の再構築の試みを中心に検討した。ユ

ーゴスラヴィア期から現在までのボスニアにおける高等学校での「国語」教科書に着目し、アンドリッチのどのような作品がどのように扱われているか、アンドリッチ以外にはどのような作家が扱われているかを検討した。成果の一部は学会で発表した。(Ayako OKU, "Building a National Literature: Highschool Textbooks for Bosniaks", The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, University of Tokyo, 2019.6.)

- (4) また、柴宜弘・山崎信一 編著『ボスニア・ヘルツェゴヴィナを知るための 60 章』(明石書店、2019)において、次の三つの章を担当した。第 20 章 ヴィシェグラード 『ドリナの橋』とアンドリッチ；第 47 章 ボスニア・ヘルツェゴヴィナと文学 中世文学から近代文学；第 48 章 ボスニア・ヘルツェゴヴィナと文学 20 世紀以降の文学
- (5) 2019 年度、2020 年度に現地調査を予定していたが、疫病の蔓延によって行えなかったため、現代文学に焦点を当て、アンドリッチに通じる「ユーゴスラヴィア性」の検討を行うこととした。成果の一部として次の論文を発表した。奥彩子「注釈としての小説、小説としての注釈 ドゥブラヴカ・ウグレシッチ『キツネ』の女性たち』『れにくさ』第 10-1 号、東京大学大学院人文社会系研究科現代文芸論研究室、2020 年、131-142 頁。
- (6) 2021 年には、古典的作品を現代に接合させる例の一つとして、ドゥブラヴカ・ウグレシッチの 80 年代の作品がどのように古典的作品をアダプテーションしているかについて論文を発表した。奥彩子「ふたつの『クロイツェル・ソナタ』 トルストイとウグレシッチ」小川公代、吉村和明編『文学とアダプテーション II ヨーロッパの古典を読む』春風社、371-399 頁。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 奥彩子	4. 巻 10-1
2. 論文標題 注釈としての小説、小説としての注釈 ドゥブラヴカ・ウグレシッチ『キツネ』の女性たち	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 れにくさ	6. 最初と最後の頁 131-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002000679	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 奥彩子	4. 巻 22
2. 論文標題 アイデンティティーの相克 - ボスニア・ムスリムによるアンドリッチ批判の系譜	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 スラヴ学論集	6. 最初と最後の頁 171-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Ayako Oku
2. 発表標題 Building a National Literature: Highschool Textbooks for Bosniaks
3. 学会等名 The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 小川公代、村田真一、吉村和明、沼野充義、野崎歓、眞鍋正紀、新井潤美、秦邦生、渡辺諒、笠間直穂子、堤康徳、奥彩子、ジョン・ウィリアムズ	4. 発行年 2017年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 370
3. 書名 文学とアダプテーション	

1. 著者名 小川公代、吉村和明、沼野充義、渋谷哲也、森田直子、野崎歡、眞鍋正紀、新井潤美、秦邦生、南谷奉良、伊達聖伸、堤康徳、阿部賢一、奥彩子、ジョン・ウィリアムズ、鴻巣友季子、前川知大	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 500
3. 書名 文学とアダプテーション	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関